



Title	明清時代における南京雲錦の模様の特徴を分析する
Author(s)	王, 澤
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 48-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明清時代における南京雲錦の模様の特徴を分析する

王 澤 京都工芸繊維大学大学院在学

はじめに

本研究は、南京雲錦^{うんきん}の明清時代時点の模様を構成する特徴を再整理し、雲錦を宣伝する価値を整理する。

南京雲錦について

南京雲錦は南京の伝統的な絹織物であり、その歴史は 417 年頃から、現在に至る 1600 年の歴史がある。古代中国に於いて、南京雲錦は過去の王朝の絹織り技法の集大成であり、中国の有名な絹織物の錦織において頂点とされている。雲錦は、現代の機械では代替不可能な技法であり、金糸、銀糸、銅糸、絹、さまざまな鳥や動物の羽毛から織る。

南京雲錦の模様の分類と特徴分析

技法と用途より分類した模様の特徴分析：南京雲錦の技術は、以前の時代の技術を集結させ、模様を変えるために様々な素材の緯糸に切り替える独特の荘華（二重緯糸で織る雲錦で最も複雑な織り技術であり、南京で最も典型的で代表的な絹織りの種類である。色彩豊かな羽毛を緯糸に織り込み、模様を表現する。）という織り方法を創造した。緯糸は頻繁に切り返しを行うが、緯糸の継ぎ目が分からないほど繊細である。仕上がった生地は汚れがつきにくく、手入れも容易である。材料には、絹のみではなく、多くの金属糸や獣毛、羽毛などが使用されるため、複雑な模様の表現を可能とする。

構図は、団花紋、散花紋、満花紋、卷枝紋、串

枝紋、折枝紋、錦群紋、7つの種類がある。南京雲錦の模様は前王朝の織物のすべての構成が取り入れられており、中国歴史上のほとんどのパターンが見られる。また、政治的影響により、清の雲錦は満州族やモンゴル族など多くの文化の流入によって模様の構成方法にも多民族の特徴が見られる。

モチーフは、動物、植物、仙道楽器道具、文字、縁起が良いモチーフ、人物、風景、6つの種類がある。技法などと同様に、明清時代の雲錦模様においても、前時代の織物のモチーフをすべて集約したものとなっている。明清時代以前にも階級によるモチーフの使用制限があったが、明清時代には強調された。例えば、通常、龍のモチーフは皇帝のみが使用出来た模様であり、皇帝の兄弟であっても龍に似た生き物に使用が限られた。その他の地位では類似した模様も使用できないなど身分による使用の制約があった。現代の作品とのモチーフの差異については、伝統的な南京雲錦には人物や風景は見られず、現代のものには存在するという点が挙げられる。

雲錦業の時代の変遷と模様因果関係の分析

明朝政府は、錦織の生産、素材、染色、織り、設備などをより高品質に管理するため、多くの政府機関を設立した。同一の機関で重複した機能を担っていたことも特徴的である。また、明王朝は、錦の生産コストや供給限度があることを考慮せず、王室や貴族の生活に錦を大量に使用したため、錦の生産供給が不足した。そのため、雲錦の生産を

民間職人に強制した。明代には、雲錦の技術は成熟段階に至り、質に加えて生産技術が飛躍的に向上した。雲錦の需要の急増、それに伴う技術の効率化の進展、そして人員不足を背景として、民族王室と貴族は、それまで政府が独占的に行っていた雲錦の生産を民間職人にも強制したのである。その結果、作り手の多様化によって民間組織の職人の発想が従来の雲錦に盛り込まれることで宮殿文化と民間文化の融合がなされ、南京雲錦の特異性が生まれた。また、雲錦の最も複雑な技術の「粧華」も、明時代に創造されたものである。

雲錦の需要はさらに増加したことで複雑な生産システムを管理するための大規模な政府機関を増設した。また、生産補填のため清政府は民間の雲錦生産制限を解除した。それにより民間の生産技術が急速に発展した。清代の南京雲錦は、従来の金糸、南京地域の特異性に加え、多様な色彩を重視する満州文化の流入によってより鮮やかで複雑な色の組み合わせに発展した。そして、清代から、満族の王室と貴族にも使用されるようになった。また、モンゴルやチベットに輸出することで南京雲錦の模様さらに多文化の影響が加わった。同時期に民間では金織り庫錦技法と粧華技法が発達した。

南京雲錦特徴のまとめと研究する価値

明清政府下で南京雲錦は蜀錦と宋錦の技術を集結させ、様々な新しい織り技術を創造した。様々な素材の緯糸に切り替える独特の粧華という織り技術がその代表である。素材面では、蜀錦、宋錦のように絹に限らず、金属や鳥獣羽毛が入れられる。模様も蜀錦と宋錦の模様の特徴を基盤とし、宮廷と民間の美意識の融合、加えて他民族美意識の融合がなされた。南京雲錦は、元以前には注目されていなかったが、元以降からは王族の専属となり、明清時代になると他の織物から着想を得た。加えて、新たな織り技術の創造、原料の多様化、宮廷、民間、他民族など様々な美意識の融合によっ

て雲錦の模様は多様化した。

現代の南京の雲錦文化保護機関は織り技術の研究を重視し、素材や織りの技術を用いた中国水墨画の風景を表現することなどに焦点が当てられ歴史的な雲錦の模様自体の保護は重要視されていない。雲錦の価値は生産技術だけではなく、模様も価値があるものだと考える。特に明清時代には、雲錦の技術も材料も成熟段階となり、模様の表現が最盛期を迎えている。そのため、明清時代の雲錦模様の再整理と研究を通じ、明清時代の歴史文化、社会背景などの理解を深めることができると考える。今後も明清時代の雲錦模様の特徴を分析し、現在の南京雲錦の保存の新たな展開の可能性について研究していきたいと思う。